

東京学芸大ヒューマンライ ブラリー2025 報告書

2025年12月7日（日）開催

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2025 実行委員会

代表 | 岡 智之（国際交流／留学生センター）

目次

はじめに.....	2
ちらし 東京学芸大学.....	3
当日プログラム	6
当日の写真	8
準備と当日までの活動	11
当日スケジュール	11
反省会議	11
読者アンケート	13
読者の感想文	19
「本」のアンケート	23
スタッフのアンケート	24

はじめに

東京学芸大学ヒューマンライブラリーも2025年で、10年目となった。今年は新しい「本」が7冊入り14冊の「本」の語りを聞くことができた。また、学生スタッフも新しいメンバーが6名入り11名となりフレッシュな雰囲気の中で、「本」と「読者」の熱心なやり取りが行われた。読者37名、計62名でまずまずの盛会であった。やはり、対面で直接語り合えることの素晴らしさを改めて感じる。毎回、運営していくことの大変さを感じるが、多様性を理解するこのヒューマンライブラリーの大きな意義とやりがいを感じる。10年目に達したが、今後代表者の定年もあり、次に引き継いでいく体制づくりを目指していきたい。引き続きのご協力をご理解をお願いしたい。

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2025 実行委員会代表 岡 智之

ちらし

東京学芸大学

ヒューマンライブラリー

2025



東京学芸大学 playground ラボ

ヒューマンライブラリーは、在日外国人、障がい者、セクシュアルマイノリティなど、生きている「本」と「読者」との対話を通して、多様な生き方を認め合う、多様性に関われた社会の実現を目指すイベントです。生きた「本」のタイトル、あらすじは、本ちらし 2, 3 ページにあります。5 冊まで本を借りられ、30 分ずつお話しできます。下記予約フォームで希望する「本」を予約してください。

日時：12月7日（日）12:30～17:30

場所：東京学芸大学 N 棟（中央 4 号館）3 階教室

主催：東京学芸大学ヒューマンライブラリー2025 実行委員会（代表：岡 智之）

後援：小金井市教育委員会、協賛：東京学芸大学教職員組合

問合せ先：東京学芸大学国際交流／留学生センター 岡 智之

okatom@u-gakugei.ac.jp

予約フォーム：

申し込み締切：定員が埋まり次第締め切ります。先着順で一回のセッションの「本」一冊につき、5 人まで一緒に参加できます。

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2025「本」のタイトル、あらすじ一覧

*下記の「本」を5冊まで借りられ、30分ずつ対話できます。

作者名	カテゴリー	タイトル	あらすじ
中嶋秀昭 〈オンライン〉	難民支援	困難が増す難民 (支援)の現状	世界中で故郷を追われた難民・避難民・庇護希望者などは日本の人口に匹敵する1億2,320万人で、世界で67人に1人を数えます。これは過去最大の人数です。しかし、米国を中心とした援助資金削減や排外主義の高まりにより、こうした人々の生存や保護はさらに厳しくなっています。現状と課題について、私が支援に取り組んでいるバングラデシュのロヒンギャ難民に焦点を当ててお伝えします。
長江春子	中国残留日本人孤児2世	戦争の疼きを引き継ぐ	日中戦争が終わって80年、もう忘れられようとしているが、その疼きを引き継いだ人たちのことを知っていますか。戦後世代語り部が語り継ぐのは中国残留婦人や孤児が置き去りにされた経緯や帰国までの苦難であることが多いが、帰国後に彼らを待っていたのは何か、その二世がどのような山や谷を辿るのかも知っていただきたい。コロナ禍をきっかけに自伝『小春のあしあと』(Amazon)に綴り、自らを語ることにした私が願うのは、NO MORE WAR!
宮田士暖 〈NEW〉	アイヌ・戦争	戦没者の遺骨収集・返還活動の中で、アイヌと戦争に向き合う	アイヌと和人にルーツを持つ私が、沖縄戦で亡くなった方の遺骨・遺留品を収集・返還する活動に携わる思いをお話しします。今年8月には、「日本兵」として戦わされたアイヌの遺族を探すため、北海道を訪れました。これまで家庭でも聞きづらかった、戦争とアイヌのことに、向き合い始めています。
小室敬子	外国ルーツの子供の日本語教育	クルド人の子供はどのように日本語を学ぶのか。	私はクルド人のために地域の日本語教室を8年間運営している。それは、全てボランティアで行っている。親の都合で日本に連れて来られた子供たちは、日本の学校に通っているが、親のサポートがない外国人の子供は日本語の習得に苦しんでいる。中学生は高校に進学する学力が身につかない生徒もいる。私が日本で感じた外国人の悲しみや苦勞をみなさんに聞いて欲しい。
そのへんのひと 〈NEW〉	多文化共生	外国ルーツの子ども学習支援ボランティア活動を通じて考えること	小金井市在住の外国ルーツの子どもの日本語・学習支援をするボランティア団体の代表です。活動の様子をご紹介しながら、ボランティア団体としてできること、できないこと、メンバーのボランティア志望の背景などについてお話し、今後も増えていくことが予想される外国ルーツの子どもたちに対し、地域のボランティア団体としてどのような存在になるのが望ましいと考えているかをお話ししたいと考えています。
榎本春音 〈NEW〉	LGBTQ、アイヌ語学習者	トランスジェンダー男性で和民族の私にとって、教育とは	トランスジェンダー・和民族とラベルを使ってみました。まずひとりの人間としてお話ししたいと思います。私は今、東京大学で教育社会学を学んでいます。私は高校生のとき、教育学部になって絶対行きたくないと思っていたんです。そんな私が今教育について考え続けたいと思うのは、トランスジェンダーとして経験した様々なこと、自分について学べないしんどさ、そしてアイヌ語との出会いがあったからです。
佐藤悠祐 〈NEW〉	LGBTQ	ありのままでは生きづらい社会の中で。	幼少期に自身の性別に対する認識が人と違うと分かってから、自分らしさというものをひた隠しにし、年齢を重ね、友人や関わるネットワークが広がってもなお自分の本音を偽ったまま生きていました。戸籍の性別を変更し、周囲にカミングアウトをしながら介護という仕事をしていますが“ありのまま

			ま生きる”ことの難しさを痛感しています。それでも、この社会の中で生きていくためのお話です。
ひらり	LGBTQ	トランスジェンダー女性 レズビアン（「T」且つ「L」）の苦悩	「体の性が男性で恋愛対象が女性」という、傍目からはごく普通の男性にしか見えない、結婚も子作りも可能な私。しかし、トランスジェンダー女性「T」且つレズビアン「L」といった複数のマイノリティ性をあわせ持つダブルマイノリティの存在やニーズが世間ではあまりよく知られていないために、その稀有な生きづらさを気軽に相談できる相手がほとんどおらず、生活場面では一人で思い悩むことも多々あります。
Yummy <NEW>	発達障がい	発達障がいと付き合う人生と今後やりたいこと	発達障がいと付き合う人生というのは、本当に山あり、谷あり、そして谷あり。たぶん人生ほとんど谷ばかり。いずれ下るとわかっていても私は山を登らないといけないのです。だって生きているから。でこぼこ道を歩く私のこれまでの人生のお話と、今後やりたいと考えて取り組んでいることについてお話しします。もしあなたの心に残る話が1分でもあったら光栄です。
ナカヤマ アキト <NEW>	聴覚障がい	手話とは何か？ ろう者としての 言語と歴史	手話はしっかりとした言語であり、ジェスチャーとの違いを明らかに分かる仕組みを体験してみませんか？手話話者も色々なタイプがあって育ちや環境によって表現も異なります。耳が不自由であっても聴者と同様に日常生活を送ることができます。そういった世界を少しでも知ることによって視野が広がるかもしれません。
大谷重司 (おおたに じゅうじ)	視覚障がい	ベンチプレス世界チャンピオンの実態	1. 現役の健常者チャンピオンは眼が見えない67歳の男です。 一昨年の3月の全国大会でも健常者の試合で優勝。 2. いろんな場面で視覚障害者は世間から分離されています。図書館でも点字図書。スポーツをするにも障害者専用のスポーツセンターがあります。その実態に疑問を持ち続けていました。 3. 町内でのスポーツジムへの参加。これだけで喜びは完結していました。 4. 可能性を見つけられたこと。限界を捨てること意識の変化。
小山祐介 (コヤ)	うつ病当事者	憤りの先に見えたもの～自分の命には価値があるといたい～	システムエンジニアとして勤めていた24歳のとき、残業100時間以上の超過労働、常駐先のパワハラが引き金となって鬱を発症しました。10回近く転職、たくさんの人に手を差し伸べてもらってアートやエンタメの活動をしてきた結果、実体験を活かした起業の機会をいただくも、挫折。コロナ禍から一人暮らしを始め、ここ数年で11kg体重が落ちるなど体調不良を経て見えたものがあります。いま自分の中にある全てをお話しします。
浜田有子	高次脳機能障害 失語症・同名半盲	隠れた障害、見えない障害。その心は？	オープンにするか、クローズにするか。その悩みを「分かりにくい障害」の方々と出会ってきました。私は過去、脳梗塞で長期入院し、リハビリを経て現在は失語症・同名半盲として働いています（意思疎通はしっかり話せるので安心して下さい）。日本の障害者法的雇用は2.5%になり良い事だけれど、アメリカ、スウェーデンなどでは割当て制度は採用していません。そもそも健常者って一体何なのだろう？リアルな現状をお話しします。
トン <NEW>	73年間の人生	波乱万丈の人生	「おぎゃあ」と泣き声をあげることなく生まれてきた私の人生。小学生の頃から万引き、性被害、いじめにも遭い、結婚後は長女を難病で幼くして亡くし、続く長男も臓器移植をしなければならない病に。そして手術の朝に襲っ

			てきた突発的な〇〇、はたして手術はできるのか？ そんなの波乱万丈の人生をお聞きになりませんか。
--	--	--	---

当日プログラム

東京学芸大学 ヒューマンライブラリー 2025 プログラム

日時：2024年12月7日（日）12時半～17時半（12時15分受付開始）

場所：東京学芸大学 中央4号館（北講義棟：N棟）3階教室

ごあいさつ

本日は、「東京学芸大学ヒューマンライブラリー」にお越しいただきありがとうございます。
ヒューマンライブラリーは、2000年デンマークで開催されて以来、現在までに70カ国以上で開催され、わが国でも全国的に行われている多様性理解のイベントになっています。東京学芸大学では今年10年目になり、13冊の「本」の方を迎えて、開催することになりました。本日は、「生きた本」との対話を心ゆくまでお楽しみください。

主催者一同

主催：東京学芸大学ヒューマンライブラリー2025 実行委員会（代表：岡 智之）

後援：小金井市教育委員会、立川市社会福祉協議会

協賛：東京学芸大学教職員組合

お問い合わせ先：東京学芸大学国際交流／留学生センター 岡 智之（〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1）
電話&Fax: 042-329-7235 / e-mail: okatom@u-gakugei.ac.jp

★ 当日カンパも受け付けております。よろしくお願ひいたします。

ご利用手順

1. 受付で、お名前と予約（「本」の時間と場所）を確認いただけましたら、予約された時間帯の5分前までに、対話の部屋にお入りになり、席にお座りください。
2. 対話の時間は、30分です。終了5分前にタイムキーパーが連絡いたします。終了時間が来ましたら、それ以上質問などなさらずに、すみやかに終了ください。
3. 対話以外の時間は、N304の読者控室でおくつろぎください。
4. 16時30分からN313で、本の方・読者の方・スタッフの交流会を行います。よろしければご参加ください。
5. 読者アンケートがありますので、アンケートフォームより、「本」へのメッセージなどお書きください。
6. 何か質問等ございましたら、青色のスタッフジャンパーを着た、スタッフに遠慮なくお尋ねください。

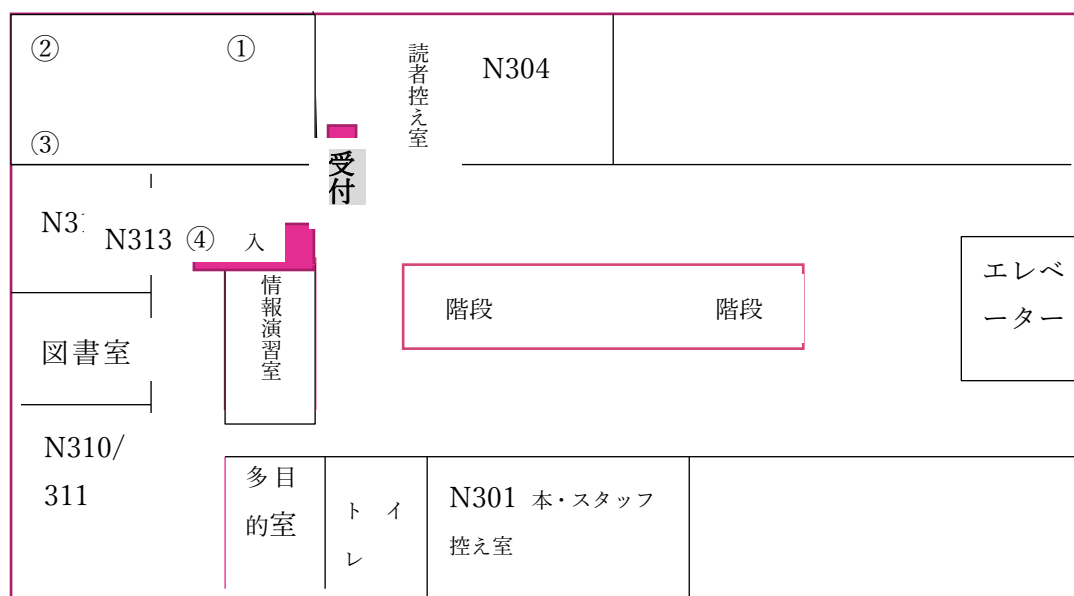
利用上のお願い

1. 「本」の方を傷つけるような言動をしないでください。「本」「読者」「スタッフ」に対する迷惑行為が見られた場合、退場していただく場合があります。
2. 主催者並びに「本」及び同席者に無断で、写真撮影や録画、録音はしないでください。
3. 「本」の方の個人情報を許可なく、ネットや印刷物にして公開しないでください。
4. 「本」の方の身体的・精神的都合で閲覧中に貸し出し中止になることもあります。
5. スタッフ及びメディアが写真撮影や取材に伺うことがあります。写真に映ることや取材を避けたいという方は受付（又はその場）でお申し出ください。

ヒューマンライブラリー2025 タイムスケジュール

教室/机番号	第1回 12:45- 13:15	第2回 13:30- 14:00	第3回 14:15- 14:45	第4回 15:00- 15:30	第5回 15:45- 16:15	交流会 16:30- 17:30
N310/311	yummy	yummy	中嶋秀昭		中嶋秀昭	宮田シノン、長江春子、浜田有子、ひらり、大谷重司、小山祐介、そのへんのひと、佐藤ゆうすけ、トン、ナカヤマアキト 榎本春音
N312	大谷重司	ナカヤマ	大谷重司	ナカヤマ	ナカヤマ	
図書室		浜田有子	長江春子	浜田有子	長江春子	
情報演習室	宮田	宮田		宮田	宮田	
多目的室	その辺の人	その辺の人		その辺の人		
N313①	小室敬子	小室敬子	佐藤	ひらり	佐藤	
N313②	榎本		榎本	榎本	榎本	
N313③	小山	トン	小山	トン	トン	
N313④					ひらり	

* 会場配置図 (北講義棟3階)



当日の写真

小山祐介さん (N313)



佐藤悠祐さん (N313)



榎本春音さん (N313)



小室敬子さん (N313)



トンさん (N313)



yummyさん (N310/311)



浜田有子さん (図書室)



長江春子さん (図書室)



ナカヤマアキトさん (N312)



大谷重司さん (N312)



宮田士暖さん (情報演習室)



その辺の人さん (多目的室)



全体交流会 (N313)



全体写真↓



準備と当日までの活動

・第1回実行委員会：日時：2024年10月22日（水）12時10分～12時40分

場所：N313

参加者：岡 智之、袁楽児（M1）杜安棋（M1）、高文婧（M1）、黄倩玲（M1）、容雪（M1）、孫佳琪（ソン・カキ／地域研究 M1）、江口、立川菜歩（E 多文化 2）、池田菜桜（C 類）

・内容：本の担当決め、当日スケジュール、宣伝方法などについて話し合う。

・10/30（木）Microsoft FormsWEB 申し込みを開始。学芸大学ホームページ、学芸ポータル、留学生 ML、異文化間教育学会 ML など宣伝。

・12月5日（金）昼休み 第2回実行委員会 直前打ち合わせ

当日スケジュール

・11時半 スタッフ集合（N棟3階）打ち合わせ、会場準備（張り紙、受付準備、会場机配置など）、案内板設置、受付シュミレーション（名簿で名前チェック、プログラム渡す、場所・時間の確認）

・11時20分 日本亭小金井北口店 弁当受け取り（袁、立川）、11時半武蔵小金井駅大谷さん迎え（江口）

・12:15-12:45…受付開始（立川、袁、カイ、容）、外案内…N棟前（杜）、正門前（孫）、S棟前（黄）

・12:45以降…受付、各部屋スタッフ配置、タイムキーパー

・16:15- 交流会準備 N313（全員）—11のテーブル作る、「本」と担当スタッフが座る

17:30- 最終片付け（全員） 18時までに解散 大谷送り（江口）

反省会議

日時：2024年12月11日（木）12:10-12:40

参加者：岡、袁、杜、カイ、黄、容、韓

1. 参加者数

参加者 総計 62名 読者 37、本 14、スタッフ 11

・読者内訳：学芸大生 10（留学生 3）、他大学学生/教職員 8、一般 19

★ 去年に比べると参加者数は 10名増えた。スタッフの入れ替わりもあり、6名新しいスタッフが入った。今後新しいスタッフももっと入れたい。

2. 日程、スケジュールについて

・日程は12月第一日曜日ではないか。

・受付は教室内（N304）にして寒くなくてよかった。

3. 「本」の設定について

- ・今回は、新しい本が7冊開拓できた。本が入れ替わって新鮮感がある。今後、在日外国人や留学生の「本」ももっと入れてもいいと思う。毎年本の入れ替わりは必要である。
- ・新しい本と事前に司書と ZOOM で打ち合わせ、リハーサルができた。

4. 広報・宣伝について

- ・ 学内ポータルや学会の ML からも来ていたが、やはり、先生・知人の紹介というのが大きいと思う。口コミが重要である。

5. 当日の運営について

- ・ 準備…会場案内の時、手持ちの案内板をつけたのはよかった。3階の会場を案内する係もいたほうがよい。初めてのスタッフは説明が大変だった。
- ・ 受付…当日プログラムに順番を書いてもらったのはよい。
- ・ 「本」に対する無神経な質問・発言があった。その場ですぐに対応し、本人に注意した。⇒マイノリティ当事者が「本」の場合、不用意な発言がないようスタッフを常に配置しておく必要はある。
- ・ 写真を無断で取っている人がいた。写真撮影ダメと張り出しなどしておくべきだった。
- ・ 大谷さんがどこにいるのかわからず介助がやりにくかった。
- ・ 各教室・セッションでの問題…スタッフが入っていないブースもあった。
- ・ 交流会…読者が余り座っていない「本」もあったので、適宜、他のテーブルと合流するなどの措置が必要。

7. 今後の予定、課題

- ・ 報告書の作成…読者アンケートの集計、スタッフの感想文 12 月中ー1 月中には完成。
アンケートはアンケート用紙を配ってその場で書いてもらった方がいいのではないか。⇒ あとで PC に打ち込む作業が大変かも。

読者アンケート

読んだ「本」の名前と感想、「本」へのメッセージをお書きください。

宮田士暖さんへ

- ・ 戦争に対して、自分から積極的に動けば様々な関わり方ができることがわかりました。多文化共修科目 B でゲストスピーカーとしてお話を聞いたとき、とても興味を持ったので家に帰ってからいろいろと調べていました。気になっていたことを質問できる良い機会だったので、とてもよかったです。

この回に参加して、怖いと思うことがありました。参加者の方が、「どうしてアイヌは差別を受けるのか」という質問を宮田さんにしていました。その質問を聞いて、自分は加害者だと感じたからです。今、和人が住んでいる場所、北海道、本州北端部は、もともとアイヌ民族が住んでいた場所です。アイヌ民族を北へ北へと押しやった罪悪感を、アイヌは土人だから仕方ないと正当化するために、私たちは差別しているのだと、あとからゆっくり考えてみたらわかりました。しかし、参加者が質問をしたその場では、私も、そういえばなんで差別されているのだろう、と誤ってしまいました。差別をしている側が罪悪感を薄めるために差別していることに対する罪の意識さえも感じなくなってしまっている自分に気付いてしまい、どうしようもない気持ちになりました。また、自分のルーツにも興味を持ってました。

- ・ 今もなお残るアイヌ民族への差別や世間の無関心さを感じました。
- ・ ウポポイで学んだりということをしていましたが、アイヌ当事者の話を聞いたことがなかったので、とても新鮮でした。現代のアイヌの様子が少しわかりました。

榎本春音さんへ

- ・ 「見て引かない」という言葉が1番印象に残りました。また、将来どうなるかはわからないから、今、目の前のことを積み重ねていって行きついた先がゴールになるという言葉も印象に残りました。あとは、自分はマジョリティ性も持っているのに、マイノリティの部分だけを主張していることの複雑さを感じているという部分も心に残りました。マイノリティの方自身も葛藤があるんだということを知れて、身近に感じたし、大切にしたい視点だと思いました。
- ・ 幼少期からどんな思いで成長し、本来の自分に至ることになったかというお話が映像のように想像できました。「裸体の人形」「男として死にたい」など、当事者の語りでしか聞けないようなことばが胸に刺さりました。勝手な解釈ですが、アイヌやマオリなど少数民族の言語を学ぶことで、現在の社会ではマイノリティとされる自己を投影しているようにも感じられました。
- ・ 教育について考えていることや、話したい人のためのアイヌ語教室など、30分では足りないくらいの盛りだくさんな内容でした。言語学者の介入なしに言葉を継承していける社会になるといいなと思います。熱心に取り組んでいる姿勢やお話しの仕方がとても上手で、聞きながらパワーを頂いたように思います。ありがとうございました。

トンさんへ

- ・ 人生が壮絶すぎて話を聞き終わった後に何も言えなくなってしまいました。なぜこんなに辛い話を達観したような話しぶりで伝えられるのだろうかという疑問に思って質問してみると、何気なく出会ったヒューマンライブラリーで包み隠さず自分のことを話す本を見て、ここなら自分も同じように話せるかもしれないと思ったことがきっかけだそうです。どんなことがあっても大切な家族のために最善の選択をし、

自分自身を壊すことなく生き抜いてきた姿勢を本当に見習って、私も自分と家族を大事にしていこうと思いました。

- ・ 自分のつらい経験を人に話すことの大切さが感じられました。
- ・ 若くしてお子さんを亡くされた経験を持つお年寄りの男性であった。ご家族がどれほど深い悲しみを抱え、そしてどれほど強く生きてこられたのかを丁寧に語ってくださった。特に、お母さまが第二子を助けるために自らの腎臓を提供したという話は、母親の愛情の深さを強く実感させられた。どのお話にも、人間の強さと弱さ、そして生きることの尊さが詰まっていた。
- ・ 波乱万丈の人生だったのかもしれませんが、ご家族への愛情が伝わる心優しいお話でした。今回が最後のお話しとのことだったのですが、今後も何か聞かせていただけるのを楽しみにしています。ありがとうございました。

Yummyさんへ

- ・ 発達障害について社会的な認知が浅く、理解が不十分だった頃に幼少期を過ごされたことは、恐らく今回お話を聞く以上に辛い経験を多くされたことと思います。部屋の片づけや食材のカットなど、具体的にどんなことが難しいのかをうかがって、多少なりと困難の一端を知ることができました。現在も、周囲の理解を得られず、生きにくい環境で仕事や育児をされているとのこと、一人でも多くの人に当事者の話を聞いてもらうことが理解を進める一歩だと痛感しました。

佐藤悠祐さんへ

- ・ 子供時代を思い出し、お話に共感して、泣けてきました。
- ・ 佐藤悠祐さんのお話を通して、LGBTQの中でもトランスジェンダーとして生きることの難しさを改めて強く感じました。正直に言うと、中国と比べると日本の社会のほうがより多様性にかかれていて、暮らしやすいのではないかとイメージを持っていました。しかし、実際には日本社会の中でも多くの困難や生きづらさがあることを知り、その現実には衝撃を受けました。そのような状況の中でも、佐藤さんが自分らしさを見つけ、介護の会社を運営し、LGBTQの方々に働く場を提供していることは本当に素晴らしいことだと思います。一人の当事者としてだけでなく、社会の中で行動し続けている姿に大きな尊敬の気持ちを抱きました。機会があれば、ぜひ一度その職場を見学してみたいです。

その辺の人さんへ

- ・ 日本文化を教えることは必要だけど、押しつけはよくなくて、子どものアイデンティティを保ちながら日本語、文化を教えることの難しさを感じました。
- ・ なぜ熱心にボランティア活動に参加されるかをよく理解しました。私もボランティアとして中国ルーツ持つ小学生への日本語指導をしたことがあります。毎週金曜日継続的に担当することではないので、何とかできましたが、佐久間さんのような方が毎週金曜活動していることに敬意を持っています。

- ・地域の日本語支援ボランティアの人がどのような気持ちや背景を持って活動に関わり、普段はどんなことをしているのかについて知ることが出来興味深かった。
- ・取り組んでいらっしゃる活動自体が非常に興味深く、ご本人のことより活動について聞いてしまったのを少し反省しています。ですが、そういう形もアリなのでしょうか？
- ・地域の日本語教室のことや、そのへんのひとが代表になるまでの話を聞いてよかったです。ロシアでのお話が印象的でした。私たちの日々の接し方が、未来の日本のイメージを作ることになると改めて思いました。ありがとうございました。

・ ナカヤマアキトさん

- ・先日はありがとうございました。手話を教えている場面を見る機会が少なかったため、「手話の世界にこうやって興味を持ってもらうんだ…！」と新鮮な気持ちで参加させてもらうことができ、すごく学びになりました。デフリンピックのお話や、普段のお仕事のお話もすごく面白くてお話足りなかつたです！またぜひお話ししたいです！
- ・ナカヤマ・アキトさんのお話もとても印象に残っています。最初はすべて通訳を通して理解するのだろうと思っていましたが、実際には私たちに簡単な手話（名前、年齢、出身地など）を教えてください、日本の手話の世界を体験しながら学ぶことができました。言葉が通じなくても、工夫次第で人とつながることができるということを実感し、とても楽しく、貴重な時間でした。ぜひ来年もまた参加していただきたいと思っています。

長江春子さんへ

- ・自分の祖母も実際に満州で育ち、日本に戻ってきた方だったので、同じ経験をし、同じ思いをしている方のお話が聞いて良かったです。
- ・先日の講義でのお話をお聞きして、もう一度より近い距離でお話を伺いたいと思いました。お話から歴史や現状を正しく理解することの重要性を感じました。ただ字面で学ぶ他人事のような歴史ではなく、その時生きていた人や今生きている当事者のご家族の経験や思いを深く知って初めて、本当の意味で歴史の出来事を実際に起こったこととして捉えられるのではないかなと思いました。
- ・お話の一つ一つが力強く、とても心を揺さぶられた。戦争が無くならない世の中だが、その裏には何代にも続く苦しみがあることを忘れずにいたい。
- ・お話ししてくださった数々のエピソードとともに、「戦争はまだ終わっていない。今でも心がうずく」、「学ぶことが唯一の希望だった」というお言葉を、これからも忘れることはないと思います。戦争はなくなれないかもしれないーそれでも、その現実にあらうことをあきらめてはいけないという、強いメッセージを受け取った気がします。ありがとうございました。
- ・中国残留邦人として幼少期を中国で過ごし、中学の頃に日本へ戻られた女性である。日本での生活にうまく適応できず、孤立やいじめに苦しんだ時期もあったと語ってくださった。しかし、学業を諦めず、奨学金を得て大学へ進学し、現在は多文化交流の促進に携わる仕事をしておられる。その力強さと前向きな姿勢に深く感銘を受けた。また「自分は戦争の犠牲者だ」とおっしゃり、誰よりも平和を願うお気持ちが伝わってきた。勇気をもって人生を切り拓いてきた彼女の姿に、励まされる思いだった。

中嶋秀昭さんへ

- ・ 中嶋さんの話を聞くと、難民たちの現状を知ることができました。ミャンマーの難民たちの今、主な病気や直面している困難など、悲しいと感じられます。そして、医療団はただ患者さんを診てあげるだけではなく、健康教育（予防、管理など）と診療所への支援（研修、モニタリング、助言など）も必要ということがわかりました。いろいろな話を聞いて、私にとっては貴重な体験でした。

小室敬子さんへ

- ・ 1 番印象に残ったことは、クルド人の方たちと日本人の小学校観の違いについてのことです。川口市にいるクルド系の両親の多くは、田舎出身で小学校に上がる前は親戚や近くの友達と遊んで過ごしたため、小学校に上がる準備として子どもを幼稚園や保育園に入れるという発想がないこと、初等教育から第 2 言語であるトルコ語を使って勉強してきた・してこれたという経験があるため、母語と違う言語で勉強することになっても学校が面倒を見てくれるから大丈夫だと思っていること、家庭で親が勉強を見るという発想もないため連絡帳の使い方がわからないことなどを教えてもらいました。現状では小学校入学の時点ですでに差があるため、プレ教育の重要性を改めて感じるすることができました。学校はボランティアにおんぶにだっこだという言葉も印象に残りました。
- ・ 私も川口市に幼少期住んでいたことがあり、トルコ人やクルド人の子とよく公園で遊んでいたのも、興味があり、お話を聞こうと思いました。クルド人の家族との関わりを聞いて、とても素敵なお話だなと思いました。外国人だから怖い、と思うのはやっぱり違うなと思いました。

ひらりさんへ

- ・ 「自分だったらこの場合どう思う？」を考える時間を作ってくれたのが良かったです。今まで自分の体験したことのないことに対して考えるきっかけができたことにより、相手の立場に立って理解しようという思いが強くなりました。
- ・ お話をお聞きしながら、自分の頭で考えてそれを言語化することはとても難しかったです。充実した時間になりました。ひらりさんのお話をお聞きして、改めて世の中には色々な人が生きているのだなということを実感しました。全く知らなかった世界を少しでも知ることができて良かったです。
- ・ LGBTQ について自分なりに理解しているつもりでしたが、ひらりさんのお話を聞いて、まだまだ知らないことがたくさんあるのだと実感しました。自分の中にいつのまにか「想定範囲」のようなものができていたのだと思います。お話を聞くことで、その枠をゆるやかに広げていけるように感じました。ありがとうございました。

大谷重司さんへ

- ・ 近頃デフリンピックを見ていた際に、障がいの有無とスポーツの枠組みについて私も疑問に感じていました。さまざまな意見が世間では飛び交う中、大谷さんは強い意志を持って競技に挑んでいらっしやってとても格好良いなと感じました。
- ・ 多くのハンデを乗り越え、健常者より優れた実績を残されている立派な方なので、それはそれで勉強になったのですが、あまりマイノリティ性というか、困難さに関する話を聞けなかったのが少し物足りなかったかもしれません。
- ・ 大谷さんは 20 代に病気で視力をなくして、その後もよく針灸などの治療を受けているそうです。以前の社会では確かに技術の原因で不自由と感ずるところが多かったのですが、今では大谷さんのおっしゃった通り、音声データをダウンロードして聞いたり、無料アプリで聞いたりすることができるようになりました。また、健康に気をつけてトレーニングして、最後にはベンチプレスで世界記録まで破ったのはとても感心しました。自分のやりたいことをどんな困難があっても諦めずにやるという決心に感動しました。

- ・私にご案内役として手を取り、会場内の移動をお手伝いした。お話を伺う中で難しい表現が出てきた際には、優しく補足説明をしてくださり、とても温かい方だと感じた。限られた時間ではあったが、短い会話の中にも相手への思いやりがにじみ出ていて、学ぶことが多かった。
- ・ベンチプレスとパワーリフティングの違いや、ジムでのトレーニングの様子、健常者との大会に参加することなど、新たな世界を聞かせて頂きました。視覚障害になってからも諦めない姿勢に大谷さんの強さを感じました。来月の試合もがんばってほしいです。
- ・ベンチプレスとパワーリフティングの違いや、ジムでのトレーニングの様子、健常者との大会に参加することなど、新たな世界を聞かせて頂きました。視覚障害になってからも諦めない姿勢に大谷さんの強さを感じました。来月の試合もがんばってほしいです。

小山祐介さんへ

- ・1番印象に残ったことは、「しんどいと思ったら逃げていい。なぜなら、壊れたり病んだりすると回復までに時間がかかるので人生がもったいない。」という言葉です。私自身も高校時代にうつ病の症状がある後輩の相談相手になっていたら自分も病んでしまった経験があるため、小山さんの話は自分の経験と重ねて聞くことができとても勉強になりました。うつの状態の時は孤独感が強くてとにかく人が恋しいこと、思考の偏りもあるため被害者意識も強いことなどを教えていただきました。高校時代にこれを知っていたら共依存にならなかつたらいいなと思いつつ、これからの人生では気を付けていこうと思えました。
- ・自分の家族のことがきっかけでお話を伺いたいと思いました。本筋のお話をお聞きして多くのことを学ばせていただいたことに加えて、小山さんの優しい話し方や考え方に触れて普段は人に話さない自分のことを話してみたいと思うことができました。ヒューマンライブラリー初参加で小山さんのお話をお聞きできて本当に良かったです。
- ・私自身、自分のことを責めやすい性格で鬱病になってしまうのではないかと不安がありました。自分の心とどのように向き合うか、鬱病はどのような病気なのかが分かり、漠然とした不安が解消されました。
- ・小山さんが大変だったと思いました。今元気でよかったです。本人からいろいろ有意義なお話を聞かせていただき感謝します。
- ・テレビ以外でうつ病の方のお話を聞くのは初めてでした。自分の人生と比較しながら、考えさせられました。

浜田有子さんへ

- ・1番印象に残ったことは、障害枠の話についてです。障害枠にすると自分の能力に適したレベルの仕事にはなるけれど、年収が大幅に下がってしまうことに苦しさを覚えている、わかりにくい障害の方が多いと聞きました。また、アメリカや北欧にはそもそもできることは人それぞれであるため障害枠という概念がないという話も聞いて、確かにその人の特性が障害かどうかを決めているのは今の社会だと思いました。また、2種類の人生を生きてきた浜田さんから今の私たちに伝えたいことを質問した時に、人生にはたくさんの分岐点があるけれど、自分の好きな方を選ぶこと、今この時点でも学校以外にやりたいことがあったらどんどん挑戦して学校の中で終わらないことなども教えていただき、心に残りました。
- ・障がいをオープンにするかクローズにするかという言葉がとても印象に残りました。私は大学で特別支援教育を専攻しており、目に見えにくい障がいのグレーゾーンにいる子どもたちが少しでも生きやすく

なる支援をしたいと思っています。目に見えにくい障がいを周囲に伝えるのが良いのかそうではないのか、大学でこの先も学んでいく中で考え続けていきたいと思っています。

- ・大変なご経験をされ、今もそれが続いているのだと思いました。社会人になってから、それまで獲得していた記憶を、言葉を失うということ。自分に置き換えたら、それを再び取り戻すことは果てしない道のりのように思われました。しかし、今回お話しして下さったように、長いリハビリの末、今はお仕事もされているとのこと。さぞ辛く苦しい時を耐えていらしたんだと思いました。浜田さんに起きたことは、いつ誰にでも起こりうることだと思います。OPENかCLOSEか、そんな悩みが必要ないような包括的な社会を目指すことが必要なのだと改めて痛感しました。
- ・わかりにくい障害を抱えながら働くということについて、まさにリアルな現状を、わかりやすくお話しくださりありがとうございました。浜田さんのお話をきっかけに、海外の障害者雇用についても調べてみました。いただいた問いかけを、いつも頭の片隅に置いておきたいと思っています。

ヒューマンライブラリー全体の感想

- ・知らなければ、知らない間に傷つけてしまうことがある。と常に思っています。今回参加して、様々な背景を持つ方とお話し、少しでも「知る」事ができたので、これからはより思いやりを持って行動できそうなので、とても良い経験でした。
- ・受講する側ももっと予習してからライブラリーに臨むべきだと思いました。
- ・今回初参加でしたが、ヒューマンライブラリーという活動に出会うことができ本当に良かったです。同じ方のお話も何年後かにはまた違った視点でお聞きできると思うので、今後も参加していきたいと思っています。ありがとうございました。
- ・大変貴重なお話を聞くことができました。やはり生の声に勝るものはありません。また参加させていただきたいと思っています。ありがとうございました。
- ・色々な方の話を近い距離で聞くことが出来てとても光栄でした。今回は3つの話を聞きましたが、他の話にも気になるのが多く、ぜひまた機会があれば参加したいと思いました。
- ・昨年も参加しました。とても良かったと思います。
- ・初めて参加したが、色々な方の色々なお話を聞くことができ来てよかったと感じた。多様性の尊重と言った時に、本で見たり知識として知っていることは多かったがそこに当事者としての人がいるその人がどのように生活し考えているのか聞く機会というもの貴重だと思う。
- ・たくさんの「本」の方がいらして、まさにライブラリーだと思いました。本の方が目の前で語ってくださる人生の物語に、頭も心も揺さぶられました。このような経験ができる場を提供して下さった皆様に感謝いたします。私の職場（大学）でも、ヒューマンライブラリーを開催してみたいと思いました。
- ・非常にアットホームな雰囲気の中で、安心してお話が聞けて良かったです。本の方々が、実はすごい人達なのだということも驚きました。是非、所属先でも実施してみたいという気持ちになりました。上記の感想を書く中で、自分が無意識に話の中にマイノリティの困難さを求めていることに気づいてしまいました。しかしそれはこちらの勝手であり、必須なことでもないように思います。誠に僭越ですが、お昼下がりにずっと一方的に話を聞いていると、（早朝に家を出たこともあり）少し眠たくなることがあるので、ずっと話し続けるスタイルよりは、少し途中でインタラクティブに交流する機会があった方が良くもしいかなと思いました。

- ・ 障害は具体的なことから、歴史的なことまでに様々な形で出てくるのだと思いました。本の皆さんが語ったことを通して、これからも見聞を広める事ができればと思いました。
- ・ 昨年、初めて参加し、今年で2回目の参加となりました。色々な話を聞くことができるということのは、なかなかないので、良い機会であると考えています。
- ・ 今回のヒューマンライブラリーでは、三名の「本」の方々と対話する機会をいただいた。どの方のお話も深く心に残り、自分の価値観を揺さぶられるような体験となった。三名の方々に心からの感謝をお伝えしたい。痛みを伴う経験を、見ず知らずの学生である私に語ってくださったその勇気と優しさを、決して忘れない。

本ヒューマンライブラリーの運営（スタッフの対応、会場の環境など）、その他についてご意見がありましたらお書きください。

- ・ 初めての参加で、場所がやや分かりにくいと思いました。案内にキャンパスマップをつけていただけるとありがたいです。
- ・ 事前にどのライブラリーに参加できるのかを教えていただけたら良いと思いました。
- ・ 開催間際に申し込みをしたので、予約確定は1枠だけだったのですが、当日、受付で2枠加えてくださり、ありがとうございました。
- ・ 素晴らしい運営を、どうもありがとうございました。タイムスケジュールに○をつけるやり方が良いなと思いました。

読者の感想文

- ・ 12月7日のヒューマンライブラリーに参加しました。色々な感想があります。

Yummiさんの発達障害についての交流会に参加しました。Yummiさんは「まじしんどい」と自分のADHDと共生している生活に思います。小さい頃から、周りの人たちから「本当にうるさい」と言われるという落ち込み、Yummiさんの青春時代を貫いた。発達障害のせいで、Yummiさんの青春時代は9年間友達0人の状態で続けていた。大学で、発達障害者としてのYummiさんはきたいすることを持っていない、やめたかった。卒業した後、社会人になったYummiさんの生活のづらいです。

同じADHDという障害を診断された私も、この苦境をよく知ります。小さい頃から周りの子供たちと違う、他の人と比べて運動能力・集中力も低いです。授業中や日常交流中に先生や話している相手の言葉をよく聞き逃した。それ以外、細かいところをよくうっかりしている。Yummiさんと同じくこの障害と共生するのはづらいだと感じた。この障害は生活上の問題を起こし、自分自身への認知を曲げた。例えば、欠陥によって、自分に対して疑いが生じる場合が多いです。「何で私は皆と違う？どうしても他の人のように普通に生きているのは無理だ。」という疑問は常に私たち障害者の心の中にある。その恐ろしい

心理状態は逆にその欠陥が起こした迷惑を強めていた。しかし、それは能力が劣っているという意味ではなく、特性の違いにすぎない。障害者の立場から見ると、問題は個人ではなく、柔軟性を欠いた環境の側にあると強く感じる。

ヒューマンライブラリーの交流会を通し、他の障害者の苦境を見ていた。みんなは強く生きているのはわたしを励まされた。私は Yummi さんと違うのは、彼女みたいに勇気を出す、「Neutral Typical」の人を障害者のつらさを理解されることは、いまできない。中国で発達障害は無視されることが多い、それを理解しまたは理解したい人は少ないだから、そんな勇気を出せない。Yummi さんは「Neutral Typical」をもっと ADHD の現状を理解される小さな一歩は偉いです。

ヒューマンライブラリーの後、ADHD 障害者への平等について、いろいろ考えていた。発達障害者の権利を保護するためには、社会全体で適切な制度と環境を整えることが重要である。発達障害は本人の努力不足や性格の問題ではなく、生まれ持った特性です。それを知ることは大事だ。まずは、排除しないことです。同じ条件で挑戦できる環境を整えべきだ。「違い」を理由に尊厳を傷つけないことはできません。それ以外にも、発達障害についての知識を正確に普及するべきだ。障害者の権利を守るうえで重要なのは、支援や配慮の内容が当事者抜きで決められないことである。発達障害の特性や困難の現れ方は人によって大きく異なるため、一律の対応では十分とは言えない。どのような配慮が必要か、またそれをどの程度求めるのかは、当事者自身が選択する権利を持つべきであり、その意思が尊重されなければならない。このように、多様な人々が共に生きられる環境を築くことである。

- 私はこのような授業の活動以外で実際に障害を抱えた人とお話しするということがあまりないので、ヒューマンライブラリーというイベントは自身にとって、貴重な機会となった。人が本となるという趣旨もとても面白い。本になるという形によって話しやすさも生まれてくるように感じた。様々な方から興味深い話を聞くことができたが、その中でも特に印象に残っている yummy さんの話について触れていきたいと思う。

yummy さんの話は私が将来就きたいと思っている教師という職業にも深く関係する話だった。yummy さんは生まれつき発達障害を抱えている。その人生は正直しんどいものだったという一言に全てが詰まっているように感じる。そんな人生の中でも小学校から中学校生活は人生の中でも暗黒期と呼べるほどのものだったようだ。Yummy さんは苦手なことが多く、小さい頃は特に怒りのコントロールが難しく、それは友達を作るうえで大きな障害となった。また、得意なことがほかにもあれば、挽回のチャンスとなり得るだろうが、小学校でステータスとされがちな勉強や運動、音楽といったことも苦手だったため、クラスの厄介者というポジションで過ごさなければいけなかった。席替え時に自分の隣になった男の子が泣き出すということもあったそうで、席替えはとても嫌な思い出として記憶に残っていると語っていた。

コミュニケーションは生きる全てであるのに、それを苦手とすることは、とてつもない生きづらさを感じるだろう。今では通信制学校や保健室登校というのものもあるが、yummyさんの時代は学校を休むという選択肢がなかったので、自分の自尊心を傷つけられることが分かっているのに学校に行かなければならぬのが辛かったという言葉聞き、学校という場所そのものが自分を否定される場所になってしまっている子供もいるということにハッとさせられた。私自身もそうだが、教員になろうという人はある程度学校生活を楽しく過ごしてきた人が多いと思うので、改めて学校に苦しさを感じている人の気持ちに寄り添う努力も必要であると感じた。yummyさんが先生にしてもらって嬉しかったこととして、交換ノートをしてくれたことを挙げていた。私も教師という職業に就けたときには、学校にマイナスな思いを抱いている子供たちが、少しでも学校でこんないいこともあったなという思いでを作ってあげられるような教師になりたいと強く思った。

- ・ 一多様性はどこまで広げられるか

最初「ヒューマンライブラリー」というタイトルを聞いた時から当日参加するまで、これが一体どのように運営されるものなのかピンと来なくて少し戸惑っていた。申し込む際も最初 の質問が「本を傷つける言動や迷惑行為をしないことに同意しますか。」だったのも印象的 で、発話者に対するマナーを求めているのだろうということはなんとなく分かっていたもの の、普通の対談とは何が違うのか気になっていた。だけど、実際に参加してみて「あ、こう いうものなんだ！」とすぐに理解できた。後で調べてみると、韓国でも地域の図書館や学校 など、さまざまところでヒューマンライブラリーが行われていることが分かった。私が選んだ本は「そのへんのひと」「トン」「コヤ」「浜田有子」、そして「ひらり」だ。その中でも「そのへんのひと」は、私自身も学校で働きながら同じような課題を感じていた ため、とても興味深く聞くことができた。韓国は多文化社会へと急速に移行している一方で、現場ではそれに対応できる人的資源や支 援 が大きく不足しているのが現実だ。韓国語の授業はもちろん、言語の壁により教室内で 萎縮してしまう児童のための心理的支援や、韓国語以外の基礎学力支援も必要とされている。しかし、「そのへんのひと」が運営している KISSAのような団体は韓国では少なく、学 校との連携も十分に取れていない。生徒を最も近くで見て、何が教育的に必要なのか判断で きるのは教員であるからこそ、地域社会と学校との協力は強く求められている。そして、うつ病当事者である「コヤ」の話は、一昨年の自分ととてもよく似ていて、「一人 じゃないんだ」と慰められた。当時の私は、悪質な保護者に脅されて精神的にも追い込ま れ、教室に入れなくなったり、生徒の前で過呼吸を起こしたりして、結局は精神科に通いなが ら仕事も休んだ時期があった。出勤するたびに「いっそ交通事故でも起きればいいのに」と思ってしまうほどだった。今振 り返れば、そこまでつらいなら仕事を辞めればよかったのだと思う。しかし当時の私は、仕 事を辞めて先の見えない未来を生きるくらいなら、人生そのも

のを終わらせたほうがまだ とすら感じていた。また、「友達としてうつ病の人にどう接すればいいのか」という質問も出ていたが、当事者 としても友人としても本当に答えづらい問いだと思う。当事者の立場では、わがままかもしれないが「いつでも、いつまでも話を聞いてほしい」と思う一方で、友達の立場になると「できないことはできない」と正直に伝えたいとも思う。もしまたいつかつらいことが起きたとき、自分は周りにどう頼るべきなのかを改めて考えるきっかけにもなった。最後の本である「ひらり」は、私にとって最も衝撃的な作品だった。なぜ自分を読みたいと思ったのかと「ひらり」から聞かれたとき、私はこう答えた。「LGBTQの中で、シングルマイノリティを持つ人への配慮は日々進んでいると思う。しかしの「ひらり」のようにダブルマイノリティを持っている人についての議論は、まだほとんどないように感じた。だからその声を聞いてみたかった」口には出せなかったけど、正直、単純な好奇心もある程度あった。だが、軽い気持ちで始めたセッションは、「ひらり」の話が進む中で、私に多くのクエスチョンマークを残すものとなった。多くのトランスジェンダーが「身体に違和感を感じた」と語っていると聞いたことがあったため、「ひらり」はどうだったのか聞いた。すると彼女はこう答えた。「私は学生の頃、陸上の選手だった。成績もとても良く、男女総合優勝を取ったこともある。身体が女性であったら、それはできなかつたはずだ。私にとって、アスリートとしてのアイデンティティは女性としてのアイデンティティよりも上にある。だから身体に違和感もないし、身体を変えたいという気持ちもない。それに、もし手術を受けていたら、娘にも会えていなかったはず」私はそれに対して、「その気持ちもよく理解できる。けれど、性転換手術を受けずに自分は女性だから女性用トイレを使いたいというのは、生物学的女性としては安全にかかわる問題だと感じてしまうこともある。見た目だけでは分からないから」と答えた。すると「ひらり」は、「その安全にかかわる問題というのは、おそらく盗撮のことだと思う。でも、女性が盗撮して写真を売るケースの割合も高いかもしれない。そうだとすれば、同じ女性でも加害者になり得るのではないかと述べた。そこで30分が終わってしまい、それ以上詳しく話すことはできなかつたが、何とも言えない気持ちが残った。「ひらり」の話に同意できる部分もあれば、どうしても否定してしまう部分もあった。しかし、ヒューマンライブラリー全般的には、普段出会えない人に会えたことは良い経験であり、「多様性はどこまで広げられるのか」「自分はどこまで受け入れられるのか」という、重く大切な問いを与えてくれた時間だった。

- ・ 私は、うつ病当事者の小山祐介さん、外国ルーツの子どもに学習支援ボランティアをしているそのへんのひと（佐久間さん）、沖縄戦の戦没者の遺骨収集・返還活動をしている宮田士暖さんの話を伺いまし

た。どの方々の話も私が知らなかったことばかりでとても参考になりました。教員になると様々な背景を持つ子ども、保護者に会うと思うので、その時に今回学んだことを役立てたいと思いました。

小山さんからは、うつ病とはどのような病気なのか、なぜなってしまうのか、周りの人はどのように接してあげたらよいのかなど私たちの疑問に答える形で様々な話をしていただきました。その中で特に印象に残っている言葉が二つあります。一つ目は「助けてあげたいという思いで接するのは危険」という言葉です。これはうつ病の人に関わる時の注意として聞いた言葉で、私はむしろ助けてあげたいという思いが良いと思っていたので驚きました。うつ病の人は助けてくれる人に依存してその人をひどく求めるようになってしまうので、逆に助けようと思った人の神経がすり減って、その人もうつ病になってしまう恐れがあるから、適度な距離を保つとよいそうです。どのようにうつ病の人と関わればいいのかわからなかったので当事者の方から答えを聞いて勉強になりました。二つ目は「未来とか過去とかぐるぐる考えるより、今を大切に、今を見るようにする」という言葉です。これはどのように病気から立ち直ることができたのか話していただいたときに聞いた言葉です。私自身、よく過去の自分の言動や行動を思い出して、一人で反省したり、未来に漠然とした不安を抱いて憂鬱になってしまったりするのでこの言葉は心に刺さりました。この言葉のおかげで、今までうつ病は自分とは遠い世界の話だと思っていたけど実は自分の考え方にもうつ病の兆候があると分かり、前向きな考え方を心がけようと思うようになりました。

佐久間さんはどのような経緯で支援をするに至ったのかを中心に話してくださいました。実際に支援をしている方の貴重な話を聞いて学問として学ぶだけではわからない実状や大変さを知ることができました。今までは外国の子でも分かりやすい教え方についてばかり考えていましたが、話を聞いて日本文化を教えながら母国の文化も尊重し、文化の押し付けにならないように教えることの難しさを感じ、新たな視点で日本語指導の在り方を見つめなおすことができました。

宮田さんは遺骨収集・返還を行うことになった経緯やアイヌのアイデンティティについて話してくださいました。見つかった遺骨の返還のために DNA 鑑定をお願いした時にアイヌであることがバレたくないからと断った人がいたと聞いて、アイヌの人達が自分の祖先なのにそれを隠すようにして生きていることに悲しくなりました。私は恥ずかしながらこの多文化共修科目の授業を受ける前はアイヌについてあまり知りませんでした。アイヌについては興味がないと中々知ることができないので世間の多くの人にもそうなのではないかと思います。そのため、アイヌの人が堂々とアイヌとして生きられるようにするために、まずは世間にアイヌのことを広く知ってもらう必要があるのではないかと感じました。

「本」のアンケート

今回の「本」としての自分の語りや読者の反応などについて感想をお書きください。

- ・ 聞いてくださる方がいることで、自分の人生を言葉にし、肯定できている空間が心地よいと感じました。
- ・ 自分についての話を複数の方に「本」として話すのは初めての経験で、要領も得ず、読者の方にとっては、聞き苦しいところが多かったと思います。読者の方から出された質問の内容から、「自分の説明の仕方が悪かったのだ」と思われることが数回あり、伝えたいことを正確に伝えることの難しさを実感するとともに、今後の課題をみつけることができました。他の「本」の方のお話は、これまでに直接聞いたこと、見たことがない内容で、大変勉強になりました。次回は、外国人で「本」になってくださる方を探したいと思います。

- ・ 今回も困難を抱えた人々や関連課題、私達の支援等についてお伝えできました。参加された皆様が学びや気づきを得られ、さらに関心を抱かれ、学びを深められて周囲の人々にも共有くだされば幸いです。ありがとうございました。
- ・ 幅広い世代や出身の方と、自身のテーマを介して意見交換ができ、貴重な経験となりました。ヒューマンライブラリーに参加するのは、読者としても本としても初めてでした。そのため、手探りではありましたが、遺骨収集の活動と、ルーツや戦争への思いの変化とを、うまく結びつけて考えていただけて、ありがたく感じました。
- ・ 本を試みての感想というよりも、ナカヤマさんの特別授業を受けてみて、発達障害を持つ児童・大人にとってと手話習得・活用の難しさについて深く考える機会を持てたことが、一番の成果でした。
- ・ 初めての参加で色々な方と交流が出来て良かったです。来年も呼んでいただけたら、是非この経験を活かしてより良い内容を提供できたらとおもいます。
- ・ 第4回目のHLでは、8人の読者の方にご参加頂き、大変光栄なひと時を過ごさせて頂きました。しかし、終わってみると私の内容がHLの趣旨に沿っていたのかどうか不安になりました。私の内容では同情は得られても差別のようなものとは別物なので「バリアを溶かす」というものではなかったのではないかと感じております。

本ヒューマンライブラリーの運営（スタッフの対応、会場の環境など）に関して、ご意見がありましたらお書きください。

- ・ 皆さん丁寧に優しく接して下さりありがたかったです。
- ・ 準備から開催までお疲れさまでした。お世話になりました。
- ・ 私専属の情報保障がありましたけど、もしも予算に余裕があれば手話通訳を2名用意していただけたらなと思いました。
- ・ 司書の方には私が落ち着いて対応できるよう何かとご配慮頂きましたので、お陰様で安心して対応することが出来ました。有難う御座いました。

スタッフのアンケート

スタッフとしての仕事についての感想、反省などをお書きください。

- ・ 今回のボランティア活動を通して、いろんな方と交流ができて、とても充実に過ごしていました。初めての参加で、少し慣れていないで、バタバタしていた時もありましたが、無事に最後までやりました。次回もぜひ参加したいと思います。
- ・ 今回、岡先生の企画されたボランティア活動にスタッフとして参加できたことを、大変嬉しかったに思っている。ヒューマンライブラリーに関わるのは初めてだったため、開始直後は「自分は何をすればよいのか」と戸惑う場面が多かった。しかし、実際に「本」の方々と接するにつれ、徐々に緊張がほぐれ、相手の話を丁寧に聞くことに集中できるようになった。今回の経験を通して強く感じたのは、知らない相手に自分の傷ついた過去を語ることが、どれほど大きな勇気を必要とするかという点である。その勇気に触れたことで、私自身も今の生活をより大切に、日々を前向きに生きようという気持ちが強くなった。また、交流会では担当した方だけでなく、他の参加者の皆さんともお話しす

る機会を得て、多くの新しい出会いに恵まれた。自分の視野が広がり、人生観までも以前とは少し変わったように感じている。反省点としては、初めての場で動き方が分からず、スタッフとして十分に貢献できなかった部分があったことだ。次回同様の機会があれば、事前に流れをもっと理解し、よりスムーズにサポートできるよう準備したい。今回の体験は私にとって大きな学びとなり、「多様な生き方を認め合うこと」の大切さを改めて実感した。参加できたことに心から感謝している。

- 思っていたよりも質問がある方が多く、本の方も喜んでいただいていたのが印象に残っています。時間配分や自分がサポートする役割ではない本の方との関わり方が難しかったです。貴重な経験ありがとうございました。
- 今回、スタッフとしてヒューマンライブラリーに参加しました。担当した作業自体は決して難しいものではありませんでしたが、準備から当日まで活動全体に関わることができ、とてもやりがいを感じました。イベントが多くの人々の協力によって成り立っていることを実感し、自分もその一員として参加できたことを嬉しく思います。今回の経験を通して、「話を聞くこと」「支える側として関わること」の大切さを学びました。とても意義のある活動だと感じたので、ぜひ来年も引き続き参加したいと思います。